

## <論文> 『平家物語』における義経像

著者	川田 正美
雑誌名	日本文学誌要
巻	56
ページ	26-37
発行年	1997-07-12
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019950">http://hdl.handle.net/10114/00019950</a>

## 『平家物語』における義経像

通常、巷間で形づくられた源義経像は、ほとんど『義経記』に基づいたものであろう。それは、白面美貌の貴公子であり、また逆境に翻弄される失意の英雄像である。

しかし、『平家物語』における義経の形象は、いたずらに理想化することなく、彼の人となりや短所を含めて客観的に彫り上げられている。と同時に、人々の共感と同情も併記されていることから、ここには既に、後半の『義経記』に通じる「判官びいき」の種が芽生えていることも推察される。

そこで本稿は、『平家物語』においては義経がどのように批判的に捉えられているかをたどっていき、最後にいわゆる「判官びいき」の萌芽がどのあたりからみられるのかを、明らかにしていきたいと思う。『平家物語』における義経の全体像を追ったものとしては、既に先学の批判的考察<sup>(1)</sup>があるが、本稿ではこれらを基底に据えつつも、さらに覚一本を中心<sup>(2)</sup>に他の代表的な異本も参看しつつ、義経像を改めてたどることにしたい。

1

川 田 正 美

義経が最初に動きのある形で登場するのは、義仲の暴状を鎮めるべく、頼朝の命を受けて、異母兄の範頼とともに上京するところである（巻八「法住寺合戦」）。しかし義仲は、既に法住寺を焼き払い、法皇・天皇が捕らえられた、との情報に接して戦闘を断念し、熱田に滞在することになった。覚一本はこうなっているが、屋代本によれば、義経らが上京したのは

平家都ヲ落テ後、兵衛佐王地ニハラマレテサノミ年貢ヲ対捍  
セン事モ恐ナレハトテ、両三年カ未進ヲ沙汰シテ千余人ノ兵  
ヲ副ヘ都ヘ被進ケルヲ、兼テ奏センカタメ

であった。それを「木曾が狼藉しづめむとて」と記述した覚一本は、義経を貴族から武士へという歴史変革の担い手として意識的に位置づけようとしたものとみることができよう。

義経が次に登場するのは、木曾軍を追討すべく宇治に迫ったところである（巻九「宇治川先陣」）。ところが橋板は取り外さ

れ、川は水かさを増していた。そこで義経は

河のはたにすすみ出、水のおもてをみわたして、人々の心を  
みんとやおもはれけん、「いかがせん、淀・いもあらひへやま  
はるべき、水のおち足をやまつべき。」

と一同に問いかける。すると早速、弱冠二十一才の畠山重忠が  
「瀬ぶみ」をかつて出るが、闘浄録・四部本では義経の問いかけ  
はなく、いきなり畠山が現れている。

義経の部下への問いかけは、この後も、義仲を都から追い出  
すという華々しい戦果を挙げ、さらに平家をも追討すべく三草  
山に陣をとるところにも出てくる（巻九「三草合戦」）。その攻  
略方法を評定する場面は、覚一本では

①義経、土肥実平に夜討ちの是非を問う。↓②田代冠者、夜  
討ち策を支持。↓③土肥、これを是とし発向。↓④兵共、辺  
りの暗さにためらう。↓⑤義経、「大松明」を提案し、土肥が  
放火。↓⑥田代冠者の出自。

という順序である。

ところが百二十句本では、②の後すぐに⑥が続いている。夜  
討ちの成功は、年若い田代冠者の進言がなかったら実現しな  
かったのだから、彼の進言（②）直後、その出自（⑥）が語られ  
る百二十句本はそれなりに意味のある順序ではある。だが覚一  
本は、その⑥をあえて最後に置くことにより、義経（①）↓田

代（②）↓土肥（③）といった、主従が一連となった流れのあ  
る問答を形成しているといえる。

このようにして整えられた義経と従者との緊密な関係は、次  
の一の谷戦では一層顕著となる（「老馬」）。搦め手の義経は、自  
ら三千騎を率いて鶴越から一の谷の背後を突こうとするのだ  
が、音にきこえた難所に攻めあぐむ。皆が「あ（ッ）ぱれこの  
山の案内者やあるらん」と口にしたところで、平山季重が案内  
役をかつて出る。が義経は、彼が東国育ちであることから危惧  
を懐く。すると、同じ武蔵国出身の別府小太郎という若者が老  
馬の話を出し、一行はその話によって前進できることになる。  
しかし日没となってしまったところへ、武蔵坊弁慶が老獵師を  
連れてくる。彼から険しい山の様子を聞いた義経は、「鹿のかよ  
はう所を馬のかよはぬ様やある」と、その子の熊王を先導役と  
して行かせるのである。

ここでは、次々と立ち現れる困難な状況を懸命に切り拓いて  
いこうとする義経と、それに代わる代わる応えながら戦闘意欲  
を昂めていく部下たちとの見事なチームワークが示されてい  
る。こうした両者の協力関係と行動力こそが、源軍の勝利を導  
く原動力だったのだ、と読み手に思わせる描き方である。

平山にしろ別府にしろ、また鷲尾父子にしろ、彼らには個有  
の力量が備わっていた。そうした彼らの提供した情報がまとめ  
て集積されたとき、それが単なる寄せ集め以上のエネルギーと  
なって十全に活用されたわけである。

このように、この章段のみならず、先の「宇治川先陣」や「三  
草合戦」にもみられた主従の絶妙な問答は、闘浄録以下の増補

系と比較するとき、後出本と目される語り系の絶えざる改変の所産であることが明らかとなるのである。

## 2

このように、ここまでの義経は、部下の力を適宜引き出しながら、破竹の勢いで義仲や平家を追討していく叙事詩的英雄——自身の欲求や意志と一体化して行動化できる集団を率いる人物——として造型されているのだが、そうした華々しさのなかにも、既に彼の弱点、泣きどころが垣間見られる。

まず大將軍義経の、部下の出身地を見よう。義経は陸奥国の出身（巻四「源氏揃」）であるが、「宇治川先陣」と「三草勢揃」をみると、部下のほとんどが関八州出身であり、奥州から伴われてきた者は、佐藤兄弟ぐらいいしかみえない。これは生後「身を在々所々にかくし、辺土遠国をすみかとして」（巻十一「腰越」）いた義経が、これといった土地を持たず、また、部下に土着武士を持っていなかったことを示している。

反面、頼朝出身の伊豆国からは三人が出ている。そのうちの一人田代信綱は、1でみたように「三草合戦」で夜討ちを主張した若者であるが、延慶本によれば「生年十一歳の年、流人兵衛佐の見参に入て宮仕」えした後、石橋山戦での活躍をかわれ、「九郎が副將軍に成給へとて被差副たる武者」の由である。つまり田代は、義経に対する目付け役として派遣されたわけである。後に頼朝に讒言する梶原景季などもその一人である。梶原と同じ相模国の出は八人もおり、その中には、石橋山戦で活躍した土居・三浦両氏の名が見えるのである。

こうしてみると、ここまでにみられた、部下の意見を引き出

す義経は、彼の特性というより、頼朝の息のかかった者たちの意見を立てざるをえない、彼の泣きどころの表れとみざるをえないのである。宇治川では、石橋山戦に参加した（巻五「早馬」）畠山が瀕踏みし、その先陣は、頼朝にライバル意識をあおられた（巻九「生ずきの沙汰」）梶原と佐々木が切り、そして三草戦では土肥が意見を述べる、という具合に、ここまでに動く彼の部下は大物ばかりなのである。

義経が一の谷戦で軍を二手に分け、「まづ土肥次郎実平をば……西の手へさしつかは」したのも、やはり目付け役だったであろう土肥を隔離させようとしたことにほかなるまい。

このように、義経の統率力とは括弧付きのそれであつたわけだが、先の「宇治川先陣」でみたように、後出本の『平家物語』は、それを義経固有の能力であるかのように拡大させている。また従者との連携も、限定された条件下でのものが本来的であつたのに、後出本では、「老馬」や、また「三草合戦」においても、義経固有の能力として敷衍させている。

このように古熊本では、頼朝の思惑の内ではしか動けぬ、おそらく実像に近い義経がほめかされていたのに、後出本ではそうした限定条件が緩み、義経個人を英雄視しようとする動きが始まっているとみられるのである。

## 3

さて源軍が宇治の木曾軍を破り、いち早く法皇の御所六条殿に向かったとき、公卿が驚喜した（巻九「河原合戦」）のは当然としても、それ以降の義経らに対する都人の反応は特に書かれていない。それがようやく出てくるのは、巻十冒頭の「首渡」

である。

一の谷戦で平家に大きな打撃を与えた範頼・義経軍は、討ち取った人々の首を大路渡しするよう強く求めるが、公卿たちは難色を示す。しかし義経らにとってその平軍追討には、「祖父為義があた」そして「ちゝ義朝がかたき」を討つという大きな意味があった。義経らにとって首渡しは、この「父祖の恥をきよめんがため」という目的を徹底させる措置であったわけだが、「卿相の位にのぼる物の頸、大路をわたさるゝ事先例なし」とみる公卿のためらいは意に介さなかった。朝廷と折り合いをつけながらことを進めず、疎外される要因をつくり出していった義仲の轍<sup>(3)</sup>を、義経も踏んでしまったわけである。

一方、都人一般の反応は、

帝闕に袖をつらねしいにしへは、おぢをそるゝ輩おほかりき。巷にかうべをわたさるゝ今は、あはれみかなしまずといふ事なし。

というように、つい数カ月前までは横暴の限りを尽くしてきた相手ではあつても、いま惨めな姿を目のあたりにすると哀憐の情を催さずにいられない、という矛盾した思いが窺える。同時にこの屋代本・百二十句本にない覚一本の一文には、過激な義経らに対する反発も籠められていよう。このような都人の気持ち汲まぬところに、彼らもまた民衆から見放され、孤立していく要因が既に潜んでいることがわかる。

それから半年後の八月六日、範朝は参河守、義経は左衛門尉

として検非違使判官に任ず、という宣旨が下った（「藤戸」）。この後範頼は平家を追って備前・児島に遠征するが、舟がないため攻めることができない。

こうした中で都では、後鳥羽天皇の即位後に大嘗会が行われ、義経も貴族とともに先陣の供奉を勤めた。しかしその評価は、

けふは九郎判官先陣に供奉す。木曾などにはにず、以外に京なれてはありしかども、平家のなかのえりくづよりも猶おとれり。

というものであった。この酷評は、作者の「都会人的な美意識<sup>(4)</sup>」によるものであろうが、「首渡」に既に窺えた都人一般の、義経に対する反感の延長線上にあるものとみられよう。それはまた、治承・養和以来の飢饉状態をよそに、形式的に大嘗会を行う朝廷の先陣に供奉した義経に対する、庶民の失望にもつながるものであろう。

ところで、そうした都人とは別の視点で、義経に疑問を投げかけていた人に後白河法皇がいた。先の首渡しの申出に対して法皇は、「此条いかゞあるべからんとおぼしめしわづら」って公卿に相談するのだが、彼のこの戸惑いは、随所にみられる術策家としての彼の挙動から推して、公卿の心配ごととはまた別のものである。すなわち、私憤を晴らすために公権力を利用しようとする義経らの要求に対しての警戒心が、義仲に対してのときと同様、彼の心中に存在していたものではなからうか。

そうした法皇の警戒心は、義経の昇格のさせ方によく反映さ

れている。義経が左衛門尉になった翌九月の二七日、彼は「五位尉になされて、九郎太夫判官とぞ申」している。つまり官職は判官止まりなのに、位階だけは昇殿を許される五位になっているのである。すなわち、名目上は「彼の欲するところの権威としての位を与えても、実際の政治的権力としての官職は」留保しておく——「まさに利用するための任官」にとどめたところに法皇の深慮が働いている。これは、この先なにをしでかすかわからない義経への先制措置とみられるのである。

ところでこの除目の日付は、増補系では史実を踏まえた九月一八日で、四部本では、範頼発向（九・二）と藤戸戦（九・二四）の間、延慶本では範頼発向（九・二一）の直前に置いている。それを語り系では屋代本は藤戸戦（九・二四）の三日後、寛一本は翌日の九月二七日としたのである。

先述のように藤戸戦では範頼だけが平家を海上に退かせたのだから、語り系の配列によれば、何も戦績のなかった義経が実質上の権限を留保させられたのは当然とみられることになる。にもかかわらず王朝的権威の授与で悦に入り、公卿の先陣に得々と供奉する義経の姿を映し出して酷評を加えたところには、語り系作者自身の義経に対する幻滅がみてとれるのである。

#### 4

卷十一からの義経は屋島の平家を攻め落とすべく、一気呵成に進軍するめざましさをみせるのだが、そうした中にもまた、義経の内部に孕んだ問題点がいくつか露呈してくるのである。

まず「逆櫓」であるが、ここで問題なのは第一に、舟に逆櫓を付けることをめぐって、梶原景時が指摘したような指導者と

しての不適格性がある。梶原によれば、よき大將軍とは時宜に応じて進退を判断しうる人物のことだが、義経にいわせれば「いくきはたゞひらぜめにせめ」るのみというのだから、両者の主張は噛み合わない。

もっともこの段階では、そうした義経の「猪のしゝ武者」ぶりが、卷九「坂落」の時と同様、戦いの勝利にうまく結びついている。海戦の苦手な源氏が水軍で鳴る平家を攻略するには、屋島の城の背後から不意打ちをかけるのが早道であり、こうしたゲリラ戦を敢行するには、慎重型の範頼と違って、猪突猛進型の義経には打ってつけだったといえる。そしてここでの梶原は、むしろ周囲から嘲笑をかう役割を与えられている。

けれども戦意が昂揚した義経に、法皇が「相構て夜を日につぎて勝負を決すべし」と檄を飛ばし、以下の義経の実践がその通りになっているのを見ると、結局彼の果敢な行動も上からうまく利用されたものにすぎないことが窺われるのである。

第二の問題点として、独断専行の性格がある。<sup>(7)</sup>部下の意見を自発的に引き出しながら進むかつての姿勢とは裏腹に、ここでは、梶原の論理的な主張といたずらに対立して義経の腹心にさえぎられたり（延慶本）、また強風下の出航に船子が難色を示すと、「舟つかまつらずは一々にしやつばら射ころせ」と脅迫するなど、高圧的な姿勢が目立つのである。

これらは、これまでの赫々たる戦歴と、先に触れた昇格などに裏付けられた自信のなせるわざなのであろう。特に四部本・延慶本など増補系では、東国の軍兵に発向を促した後で、「勅宣を奉りたればかくは申そ」（延慶本）と、彼の行動が院宣に基づ

くことを強調している。

同時にもう一つ、こうした義経の独り善がりの行動の背景には、先述の如く、自分の土地を所有していないということが挙げられる。すなわち、土着の部下を持たぬ義経の身分はいつも不安定であり、本段のような非常の際の侵攻となると、命を捨ててまで従う者は自ずと限られてしまうことになる。覚一本が「梶原におづるかしてみなとゞまりぬ」と増補したのも、義経と梶原のそうした決定的な違いを端的に示している。

このように大坂越は、義経の「猪のしゝ武者」ぶりがうまく働いて成功するものの、味方を二分する禍根を残してしまい、彼の弱点と限界をあらわにくる。

続く「勝浦付 大坂越」では、義経の侵攻ぶりは「逆櫓」にも増しためざましさを示す。「逆櫓」末尾では、三日かかる航路をわずか三時で急行してしまったことがみえるが、ここでも彼は、二日かかる山道を一晩で越えてしまう超人性をみせている。また本章段最後にみられるテキパキとした下知は、巻四「橋合戦」の足利忠綱のそれを思わせるが、本来山育ちの義経にはそれができない筈であった。にも拘らず、海上でこうした具体的な指示ができたところに義経の卓抜さが示される、ということになるのである。

義経の成功が、有能な部下の力にも支えられてきたことは再三触れたことだが、ここでも、そうした一人と目される伊勢三郎義盛が登場する。義経は彼に、

「あの勢のなかにしかるべい物やある。一人めしてまいれ。

たづぬべき事あり。」

というが、「しかるべい物」が何を意味し、「たづぬべき事」が何なのかはわからない。しかしそれだけの命で義盛は、主の意に叶う人物・近藤六親家を引き連れてくる。それも「只一騎かたきのなかへかけいり」で、である。作者が「なにとかいひたりけん」といぶかしがったように、義盛の離れ業は常人の理解を超えているとしかいえない。

さてこの親家という男を、義経は拘束しながらも丁寧に扱い「物の具なぬがせそ」、彼のもつ土地の明るさと敵の情勢を最大限に引き出し、新たな勢力として引き入れていく。敵側であったはずの親家は、いつか完全に義経の手中に収まってしまうのである。

さらに親家が「かつ浦」と言った途端、義経はそれを「勝浦」と聞き、相手がお世辞を言っているのだと受け止めてしまう。あらゆることを勝利に結び付けずにはおかぬところに、彼の昂揚のほどが示されているよう。

しかし翻ってこのようなめざましい彼の行動を見直してみると、阿波への急行も、敵の一員を捕らえての活用も、みな危険と隣り合わせてのものであることが浮き上がってくる。彼の自信の背景には、繰り返し述べた通り五位尉への抜擢があるのだろうが、その途端にこのような一か八かの手段を立て続けに行ってしまうところに、平家側からも「すゝどきおのこ」（捕らえた男が所持していた立文中の表現）と評されるような性情が表出しているのである。義経は、こうした指摘を含む敵方の文書

をも、自らの武勇を頼朝に証し立てる絶好の資料として秘蔵するのだが、こうした一途さも、ここまでの成功に結び付く要因であったと同時に、ひとたび誤れば容易に蹉跌を生じるものであることは、いまも指摘した通りである。

このような、成果と危険が一体になった義経の猛進ぶりは屋島戦でもみられる。

おそらくは武運を占うためであった扇の的を射る平家の余興〔那須与一〕も、すべてを戦いに結び付けずにはおかぬ源氏のこと、後藤兵衛実基は、大將軍を矢面に立たせて射落す計略だと早合点してしまう。さらにこの後、那須与一の成功に、感極まって舞を始めた男をも与一は射殺す。義盛の「御定ぞ、つかまつれ」という言葉で明らかなように、これも義経の命令である。〔義経の戦争にとって、全時代的な「美」は無価値であった。<sup>(8)</sup>〕

扇の射矢は平家の挑戦という実基の解釈を聞いた義経は、戦いの一環としてこれを受けて立つ。拔擢された那須与一がいったん辞退するや、戦意の昂揚した義経が「大にいか(ッ)」たのも無理からぬ話である。かけ鳥を射落す確率が少ないからという与一の辞退に対しても敢行させる強引さは、「逆櫓」以降みられた、勝利のためにはいささかの妥協も許さぬ義経像そのものである。先学は「主人の怒声の中に、与一は励ましの声を聞き取ったはずだ<sup>(9)</sup>」と読み取るが、これまでと寸分違わぬ義経の物言いには、叱咤はあっても激励はなかったであろう。だからこそ与一の苦悩が、読み手に悲痛に迫ってくるのである。

このように平家の意図と齟齬をきたし、これをも勝負のしどころと肩をいからず源軍の大將軍・義経は、ここでも危険と隣

り合わせの行動を遂行する人物として一貫して描かれているわけである。

こうした義経像はしかし、原態からのものではなさそうである。まず四部本では、「源氏<sup>の</sup>兵共見<sup>て</sup>之<sup>を</sup>失<sup>ひ</sup>色<sup>を</sup>誰<sup>も</sup>承<sup>しか</sup>思<sup>ふ</sup>」<sup>(10)</sup>に推された弁慶は辞退して和田を推し、金子が和田を退けて与一を推すというように、その対応は集団的に描かれている。

ここには実基の分析がなく、義経はただ「与一射<sup>を</sup>」と命じるだけである。また延慶本では、実基が与一を推しているが、義経はここでも四部本同様、ただ一言「あの扇仕れと宣け」るのみである。義経のつぎのような有無をいわさぬ言動は、語り系をもって始まることになるわけである。

判官いかりての給けるは、義経はかまくらどの、御代官として、平家ついたうにまかりむかふたり、されば義経が下知をばそむくべからず、それにしさいを申さん人は、すみやかに本国へ下らるべし……

さらに中院本や国民文庫本など八坂系では、傍線部の「かまくらどの、御代官」が「一院の院宣を承つて」となっており、「叙位任官によつて法皇直属の官僚という意識が先行する」義経像にエスカレートしているのである。そしてこのように「強権を振りかざした義経の姿<sup>(11)</sup>」は、先の「逆櫓」にもみられたところである。

その「逆櫓」に始まった義経と景時の対立は、「壇浦合戦」で源平が矢合わせする段になつて両者間に決闘が起こりかけ、周



囲が押し止めるというほどに決定的となる。かつて部下と共に歩み、彼らの能力を引き出すことによって状況を次々と切り拓いてきた義経も、昇進を機に急速に叙事詩的英雄の面影を失っていく。彼らの先陣争いは、もはや「宇治川先陣」や「一の懸」の段にみられた前進的エネルギーに転化していかない。（その後の梶原一族の奮戦は、この先陣争いが契機となったものでないことは、この争論を欠く四部本・延慶本のような異本が存在することで知られる。）

しかし『平家物語』は、義経のそうした変貌の要因を、彼自身に内包する問題に求めようとせず、景時が頼朝に讒言したことに帰着させてしまう。義経の英雄時代の終焉を告げるのと軌を一にして、『平家物語』の場面構成も、叙事詩的なものから物語的叙情ないし劇的対立へと転換させ始めているというべきであらう。

このようにみてみると、かつて「宇治川先陣」などでみられた主体の改変（源氏→義経）という諸本の推移も、このような物語的叙情への移行の現われと捉えることができそうである。このことはこの「壇浦合戦」にもみられる。本章段の末尾近くで、海戦を得意とする平家の強弓・山賀秀遠の率いる軍勢に、さすがの義経も手の下しようがなかった場面である。

兵藤次秀遠は、……五百の矢を一度にはなつ。……大將軍九郎大夫判官、ま（ッ）さきにすゝ（ン）でたゝかふが、楯も鎧もこらへずして、さんぐゝにいしらまさる。

ところが、右のようにさんざんに射られる源軍の代表に義経を充てているのは覚一本および長門本・盛衰記の三本だけで、屋代本などの語り系および八坂系諸本、更に四部本・延慶本など他の多くの諸本は、

……鎧も楯も射徹サレ源氏射シラマサレテ遭退ク（屋代本）

というように、源氏勢一般であつたのである。

しかし、このような主体の改変もここが最後である。平家殲滅の役割を終えた義経に、以後戦闘の機会はなく、従つて集団の中で行動することはありえない。以降の義経は以下に述べるように、一転追われる身としてまったく単独に描かれることになる。

## 5

歴史変革の担い手としての役割を終えた義経を、以後の『平家物語』は、海戦までの勇猛さとはまた別の角度から造型していく。その第一は彼を不見識な人物としている点であり、その第二は彼を情の厚い人物としている点である。

第一点については、まず義経を頼朝に疎まれ追われる身として、状況を設定させている。その原因として物語は、先述の如く梶原の讒言を用意したのであるが、更に「文之沙汰」では、都での義経の評判のよさに頼朝が機嫌を損ねたこと、またあるうことか平時忠の娘婿になって時忠を優遇した不見識さに頼朝が呆れたことを記している。これらは、頼朝と義経の不和を招いた原因として仕組まれた話であらうが、しかしそうした虚構

の中で描かれる義経の軽率さは、頼朝の不興をかったのも無理からぬと思わせる説得性を有している。

「文之沙汰」では、「女房な(ン)どのうちたへなげく事をば、いかなる大事をもてはなれぬ」という風評通り、時忠の「さきの腹の姫君」の申出に、「封をもとかず」大事な文を、それを娘にでなく、当の「時忠卿のもとへ」「いそぎ」「をくら」せてしまう義経が描かれている。頼朝は文の一件を知っていたわけではなく、義経が平家方の娘婿となったことに怒ったのであるが、右の如き無頓着な義経では、「争か世をしづむべき」と頼朝が慨嘆するのも当然のこと、と享受者も領けるような、ここは形象なのである。

さて第二点については、次のような記述が、このあたり以降に頻出する。

判官物のふなれどもなさけあるおのこなれば、身にしみてあはれにぞおもはれける。(内侍所都入)

道すがらあまりに心ぼそげにおぼしければ、判官なさけある人にて、やう／＼になぐさめ奉る。(腰越)

この「なさけあるおのこ」という四部本や屋代本にはみられない増補こそは、後出本『平家物語』の著しい特色であり、また「副将被斬」での宗盛の訴えに、

「誰も恩愛はおもひきられぬ事にて候へば、誠にさこそおほ

しめされ候らめ」

と全面的共感を寄せる義経も、屋代本や四部本、延慶本にみられないのである。

しかし、いかに「なさけあるおのこ」の義経でも、敵一族を亡ぼさねばならぬという宿命から免れることはできない。副将の措置を河越小太郎から問われた義経は、「なんぢともかうも是であひはからへ」と彼に一任する。それを河越は「サラハ可失人ヨト心得」(屋代本)るが、これは彼の一人合点ではあるまい。義経の言葉は、副将への処刑を前提とした指示であろう。歴史の必然を敢行した点では、義経も頼朝も軌を一にしていたのである。ただその歴史的宿命と人間感情との相剋が、人によりさまざまであった。頼朝が氷のような冷徹さで戦後処理を進めていったのに対し、義経は処刑されていくどの人々にも満腔の同情を惜しまなかった。覚一本に代表される『平家物語』後出本の作者は、歴史の宿命の線ぎりぎりまで情愛の手をさしのべようとした義経を、大きく造型したといえる。

さてこの後、物語は〈梶原の讒言〉〈義経の慨嘆〉〈腰越状〉と続けられるが、これら落日の義経を写す部分は、古態本にないので後世の付加と思われるが、こうした増補過程下で、いわゆる「判官びいき」が生み出されてきたのであろう。

## 6

巻十二に入つての「土佐房被斬」では、その叙述全体にわたって、屋代本独自の潤色が著しい。義経は、「腰越」で鎌倉より追い返されて以来の登場であるが、そこまでの惨めな姿とは打

つて変わり、ここ京都での彼は、暗殺者の企図を見抜き、独り奮戦する雄姿がめざましく描かれている。それは本段の冒頭に、

勸賞おこなはるべき處に、いかなる子細あ(ツ)てかかゝる聞えあるらむと、かみ一人をはじめ奉り、しも万民に至るまで、不審をなす。

と叙述されている通り、梶原の讒言を信じ切った頼朝に追い詰められていく、悲運の義経に対する同情に基づくものであろう。

彼の洞察力は並外れており、土佐房昌俊が頼朝の密命を受けたことを見抜いた上、そのときの頼朝の言葉をそっくり復元して相手を驚かす。また、昌俊が身の潔白を証明すべく記請文を書こうとすると、「とてもかうても鎌倉殿によしとおもはれたてま(ツ)たらばこそ」(a)と醒めた言い方をするなど、これまでの義経にはみられない理想化が施されている。

続いて登場する静の形象も、義経と好一对の言動をみせる。彼女は、それまでの騒ぎを夜討ちの準備と推察し、早速に様子を探らせる。それが確認されるや、義経に「きせながと(ツ)てなげかけ奉る」(b)機敏さである。そしてこれを受けた義経は、「只一騎おめいてかけ」入るのである。

このように覚一本では、義経と静の動きは華々しいが、しかし、これらのあまりに理想的な潤色が不自然に映ることも否定できないであろう。

その点で、屋代本はもっと着実な記述ぶりといえる。例えば、昌俊との対決場面では、

殺サレテ候ト申モ終ネハ土佐房……推寄せテ時ヲトット作・伊与守ハ折節灸治シテ物具スヘキ様モナクテ御坐シケルカ時ノ声ニ驚テカハト起テ……喚テ懸給フ

となっていて、覚一本のような静のつつさの行動(b)がみられぬばかりではない。傍線部の表現には、覚一本にはない臨場感とリアリティが存するのである。

次いで、記請文を書こうとする昌俊に対する義経の言葉(a)であるが、屋代本では「其ハ書ウ共・書シ共・御房ノ心」と弾力的であり、昌俊自身も「暇申テ帰」ってしまっている(ちなみに覚一本では、義経から「ゆ(許)りてかへ」されている)。そして弁慶が「何トヤ覧アヤシウ覚へ候・追付テ首ヲ候ハヤ」と進言しても、義経は「思ニ何程ノ事力有ヘキ・只帰セ」と、とりあわないのである。

これらの記述には、義経の西国支配を頼朝がどう思っているか、という点にまでは彼が思い及んでいないこと、あるいはまた、昌俊を倒す腕に自信はあっても、密偵をつかわすまでに至った頼朝の執念深さを深刻に受け止めていないことなど、義経の情勢判断の甘さが示されているといえよう。それが覚一本では、いわゆる「判官びいき」にわざわざいされてか、そうした義経の弱点が消えている。

しかしその覚一本にも、本段最後の、昌俊が大庭に引き据えられる場面だけ、右にみたような側面が垣間見られる。それは、昌俊の命を捨てての志に感じて、「和僧いのちおしくは鎌倉へ返しつかはさんはいかに」と助命をもちかける義経の言葉で

ある。相手の昌俊から「おしと申さば殿はたすけ給はんずるか」(c)と見下されてしまうようなところには、かつて一時の感情に溺れて、できる筈のない宗盛の助命を請け合った(「腰越」)ときと同等の、情勢認識の甘さがみられるのである。

## 7

義経の終焉は「判官部落」に描かれる。

範頼は既に斬られ、頼朝の妻政子の父・北条時政が討手に上つてくると聞いた義経は、ついに京を去る決意をし法皇から下文を申し受ける。義経としては追われる立場ながら、都を去るに当たってはそれなりの大義名文がほしいところであった。左に引く屋代本の傍線部がそれに当たる。

……為<sub>レ</sub>世 為<sub>レ</sub>君 御心苦ク候へハ 西国方へ落行ハヤト存候・度々平朝敵ヲ候シ・奉公争力御忘候ヘキ・鎮西者共心ヲ一ニシテ可合力ス由・庁ノ御下文ヲ給候ハヤ

ところが、屋代本では義経の言葉にみえるこの大義名分が、覚一本では左の(a)のように諸卿一同の言葉に、そして法皇への奏聞には(b)のように置き換えられるのである。

義経都に候て、関東の大勢みだれ入り候ば、京都(の)狼藉たえ候べからず。遠国へ下候なば、暫其恐あらじ。(a)

そして、義経の法皇への奏聞にはつぎのようになるのである。

頼朝、郎等共が讒言によ(ッ)て、義経を討たんと仕候間、しばらく鎮西の方へ下らばやと存候。(b)

「為<sub>レ</sub>世 為<sub>レ</sub>君 御心ク候へハ」と、都落ちの辛い心情を伝える屋代本と比べ、覚一本では、法皇が頼朝と結託しているのも知らず(a)のようなことをいったり、西国行きは一時的なもの「(b)の「しばらく」とするなど、いまだに自分が決定的に追い込まれている事態を呑み込んでいない義経が浮き彫りにされている。そして覚一本の(a)の位置は、そうした凡庸な義経の西国行きをなんとか大義名分化しようと、法皇らが絞り出した苦肉の策であるかのようにも見えるのである。

いまは用なしとなった義経を「逆臣」(屋代本)と呼んで憚らず、その遠国行きを歓迎する「その場しのぎの無節操」な公卿たちに遭って、「いささかのわづらひもなさず、浪風もたてずして下」る義経の後姿には、まさしく「判官びいき」の発生するのも無理からぬような哀感が漂う。

このようにして都を出た義経であったが、その後の彼の足跡を記す

……折節西のかぜはげしくふき、住吉の浦にうちあげられて、吉野のおくにぞこもりける。吉野法師にせめられて、奈良へおつ。奈良法師に攻られて、又都へ帰り入、北国にかゝ(ッ)て、終に奥へぞ下られける。

という、終りを急かすような慌ただしい逃避行の中に、闘う姿

勢はまったくみられない。太田頼基を追い払ったほかは国中をただ逃げ回るだけとあった義経の映像は、もうこれ以上彼を書き続けるに値するだけの関心が作者から失われてしまったことの結果であろう。かつての在地武士の期待にもはや応えられなくなった義経は、『平家物語』の中に自分の占有する座を失ったのである。<sup>(13)</sup>

そして、四部本のように「朝出調夕空云可<sup>(レ)</sup>不<sup>ル</sup>令<sup>(レ)</sup>恥乎<sup>(レ)</sup>」と批判する手厳しさがなく、「朝にかはり夕に変わる世間の不定こそ哀なれ」と、すべてを「世の無常の哀感に昇華<sup>(14)</sup>」するような覚一本の結び方は、義経の歴史的本質を、観念的な「無常」一般の概念の中に溶かし込み臍化しようとしたものといわざるを得ない。そしてことによると、そうしたところに異質な義経造型——ほかならぬ「判官びいき」が忍び寄ってきたのかもしれない。

\* \* \*

こうして、義経のとった行動の軌跡は終わるわけだが、みてきたように『平家物語』の義経像は諸本必ずしも一様でないが、「覚一本が現れた頃には、義経に対する庶民的な同情は、もう十分その説話化の傾向をみせていた<sup>(15)</sup>」といえることであろう。

義経の登場場面を便宜上、第一部(義仲追討まで)、第二部(平家追討まで)、第三部(平家討滅後、頼朝に追われるまで)と分ければ、これまでみたように覚一本は、第一部の源軍の進攻場面では、それまでの主体を源氏という集団から義経個人に絞って来、その義経を、第二部の院宣を受けた後では批判的に描くという行き方をとってきた。ここまでの覚一本の方法は、もち

ろん「いわゆる『判官びいき』というところにあるのではない」<sup>(16)</sup>が、集団から彼を単独に絞り出そうとする傾向はあった。その描き方は、第三部で一転追われる立場となつて、否応なしに彼独りの行動に焦点を絞らざるをえない、という造型から溯ってみれば、その端緒であつたともみられよう。

『平家物語』は、義経の「没落していく姿を、その叙事的文学方法によつて<sup>(17)</sup>」特に第一部・第二部で「義経の内包する要因を描出せしめている<sup>(18)</sup>」のだが、作者はそれを意識できず「外的要因として梶原の讒言を挙げて<sup>(19)</sup>」しまう。そのときから、『平家物語』作者の叙事的姿勢は崩れていき、叙情的姿勢へと転化していくわけである。覚一本の第三部にはそれが明瞭に示されているが、第一・二部で胚胎した義経個人への関心が、第三部では彼への同情となつてくる。そして「土佐房被斬」にみたように、彼の行動描写は多分に説話的となっており、そのデフォルメされた相貌は、かの『義経記』にもう一步の様相を帯びているのである。

(注)

- (1)(5)(6)(17)(18)(19) 正木和美「義経の凋落」(法政二高『研究と評論』二五号)
- (2) 岩波・旧日本古典文学大系本
- (3) 拙稿「平家物語における義仲像」(『日本文学誌要』四一号)
- (4)(7) 佐々木八郎「平家物語評講」
- (8)(10)(11)(13) 『平家物語論考』(私家版) 卷十一・総論(正木信一)
- (9) 「平家物語評釈」卷七・那須与一(『解釈と鑑賞』S四二・一二)
- (12)(14) 別冊「国文学」・「平家物語必携」卷十二・判官都落(今井正之助)
- (13)(15)(16) 富倉徳次郎「平家物語全注釈」

(かわだ まさみ・一九六六年卒)